

查

を筏師といふ也、都鄙にこれ有中にも嵯峨の大井川の筏歌によめり、

〔七十一番歌合〕中四十二番 左 筏士

此ほどは水しほよくて、いくらの材木をくだしつらむ、

〔倭名類聚抄〕十一 查 唐韻云 楂字亦作查、水中浮木也、

〔箋注倭名類聚抄〕三 按玉篇 楂 水中浮木也、孫氏蓋依此說文無查字、有粗字、云、木閑、又有槎字、云、裴斫也、恐並非此字、又按槎、水中浮木、非舟船之類、博物志載、有人乘槎到天河、疑源君據是舉之、然本是荒誕、不足為據、又神代紀云、以無間堅間為浮木、亦是神代之事、不得據之以槎為舟類、

〔類聚名義抄〕三 槎查 上通下正、ウキ、 槎槎 或

〔書言字考節用集〕七 槎器財、ウキ、浮木也、槎同、浮木同、

〔日本書紀〕二 神代一云、以無目堅間為浮木、以細繩繫著火々出見尊而沈之、

〔源氏物語〕十八 風舟にて忍びやかにと定めたり、辰の時に舟出し給ふ、中御うた、石上

いくかへりゆきかふ秋をすぐしつ、浮木にのりてわれかへるらむ

〔源氏物語〕五十三 中將薰の御文あり、略 中例ならずとりて見給ふ、物の哀なる折に、今はと思ふも

あはれなる物から、いかおぼさるらむ、いとほかなき物の端に、

こゝろこそうき世のきしをはなるれど行へも、えらぬあまのうき木を、例の手習にし給へるをつゝみて奉る、

〔新古今和歌集〕七 題えらす

藤原實方朝臣

あまの川かよふ浮木にこととはむ紅葉の橋はちるやちらすや